

おばあさん（ムドゥルココ）とひとりのスルタンが住んでいた町で起こった話。そのおばあさんは雌山羊を持っていた。その雌山羊が仔を産んだ。丘の上の方に繋がれていた雌山羊が仔を産んだのだった。仔山羊は母親から離れて、丘の下にいたスルタンの雄山羊たちに混ざってしまった。

朝になって、雄山羊たちの様子を見に来たスルタンは、そこで彼の家畜の中に一匹の仔山羊を見つけた。

「おお、私の雄山羊たちが子供を産んだ」。

スルタンは実際には雄しか持っていなかったのだが。

「こいつは私の雄山羊たちの子供だ」。

そこで彼は自分の群れの中にその仔山羊を入れてしまった。

ちょうどその朝、自分の雌山羊を放しに来たおばあさんも、それが子供を産んだとわかったが、その仔山羊はスルタンの雄山羊に紛れてしまった。

「スルタン様、その仔山羊を返して下さい。それは私のものです」。

スルタンは答えた「いやいや、それはお前のものではない！」。

彼らは長い間言い争ったが、結局おばあさんが折れて、帰った。

おばあさんは隠者に会いに行くと彼は言った。

「私は、お前の仔山羊を取り返すのを助けてくれそうな人を知っている。彼はイブナシーヤという名前だ。ところで、イブナシーヤに会うには彼の畑に行かなくてはならない。彼が高いところから下りて来るのを見たら、彼の方に向かって、低い方から上って行けば、彼に会えるだろう。もし、彼が低い方から来て高い方に上ろうとしたら、反対の方向に下りれば彼に会えるだろう」。

おばあさんはイブナシーヤの畑に着いて、彼が丘の高いところから下りて来るのが見えたので、彼女の方から丘を上った。そうしてとうとう鉢合わせして、お互いにびっくりさせることになった。

「僕の畑に何をしに来たのですか？」。

おばあさんは、ここは自分の畑でも彼の畑でもない、と言うと、イブナシーヤは言った。

「ここは僕の畑ですよ、おばあさん」。

彼らはそこで言い争ったが、イブナシーヤがとうとう尋ねた。

「どういう理由でここまで来たのか言って下さい。あなたがここに来るには大事な理由があるはずですから」。

「何があったかという、イブナシーヤ、私の雌山羊が子供を産んだのだけれども、その子はスルタンの雄山羊の群れに混ざってしまった。スルタンはその子を取ってしまい、彼のものだと言い張っている。私は仔山羊を返してくれるようスルタンに懇願したけどだめだった。拒否したんだ」。

「家に戻って待っていなさい。今日は月曜だから金曜まで待っていなさい。あなたの仔山羊を取り返すための解決方法があります」。

彼女は彼のいうことに従い、じっと待った。

木曜の午後になって、イブナシーヤは、青バナナ、米、ソースなど、食事にするものを何でも取って置き始めた。金曜日になって、人々がお祈りに向かい始める時、イブナシーヤは子供たちを呼んで、それらの品々を持って行くように命じ、子供たちは、色々な物や台所用具を持って行ったり来たりした。

スルタンは思った「またイブナシーヤは今日何をするというのだろう」。イブナシーヤはスルタンに答えた「私の父が子を産んだので、お祝いをするんです」。

「産んだというのはお前の父親なのか、それとも父親の細君なのか？」。

スルタンは叫んだ「産むのは男ではなく女なのだ」。

「なんと言われました？」。

「産むのは男ではなく女なのだ、と言ったのだ」。

「スルタン様、では《産むのは男ではなく女である》という証明書を書いて署名して下さいますか？」。

スルタンは《男は産むことはなく、女である》と明記した書に署名することを受け入れた。

「それではお願いですが、仔山羊をおばあさんに返して下さい。何故なら、あなたの雄山羊たちが子供を産むなんてことはあり得ませんし、産んだのはおばあさんの雌山羊だからです」。

スルタンはおばあさんに子山羊を返した。